

ひたぎガハラ

〇〇一

ですか？ その恐ろしい話というのは。あ、饅頭怖いの類ですか？」

「たわけが。そんな面倒な、仕込みの必要な話ではないわ！ ま、いつもの我があるじ様と……」

「儂は、恐ろしいものを見た……」

「ほう。忍さんが恐ろしいだなんて、随分とめずらしいですね。まつたく、一体全体どんなことなんですか。あ、これ、いただきますね」

「うむ。オールドファッショング『黒みつきな』とは、なかなか深いところを突くのう。よいよい。食べるがよい」

「さすが無駄にお詳しい……」「まあ、聞くがよい。それがな、今回はちよつと違うのじや」

「むう、本当ですか？ ですが、どうも恐ろしい話じゃあなさそうですけど」

「無駄とはなんじや。儂はこの怪異業界において、ミスターードーナツとオーディオに関しては誰にも負ける気がせんぞ」

「……業界つて……いや、もつと負けないような分野はあると思いますが……で、一体全体どんなことなん

な業界つて……いや、もつと負けないような分野はあると思いますが……で、一体全体どんなことなん

「忍さんの夜更しとは、お昼ごろですかね」

〇〇二

思わず独り言。

子供のことも考えると、やつぱりね——

「それにもこのガラクタは何なの！ まったく、いつまでたつても——」

今日は押し入れの整理をすることに決めていた。

前から、やろうやろうと思っていたのに、なかなかできなかつた。なんだかんだと忙しかつたし。

暦はどうも妙に物を溜め込むクセがあるのよね。昔からこうだつたかしら？

そんなに広くない私達の部屋。

どうも片付かない。私一人ならこんなことにならないのに——

そういうえば暦の実家の部屋は、それなりに小綺麗だつたような気がしたけれど……ふふつ、あれはあれで、氣をつかつてたのかしら。

それはそうと——

「そろそろ引越しも考えないとだめかしらね」

なんて文句を言いつつ、私は押し入れの中に上半身を隠すような形で整理をしていた。

奥へと進むほど何故仕舞い込まれてているのか、よくわからないものが増えてくる。

古い漫画の単行本、雑誌——うわ、すごいホコリ！ 掃除器でホコリを吸い取りながら、奥へと進む。

大体この部屋の作りつておかしいのよ。なんで押し入れがこんなに広いのかしら……まあ、便利だけれど。こんなところも暦の趣味なのよねえ。

プラスチックの箱、ダンボール箱、昔使つていた洋服ケース——洋服ケース？ なんでこんな奥に？

「あらあら、こんなところにあつたのね。捨てたと思つていたけれど、まだあつただなんて……それにしても懐かしいわ」

それは私のものだつた。

私立直江津高校——

私が曆と出会つた場所。

「この制服、色々いじつてたのよねー。オシャレにネクタイにしたりして

まあ、もつとも、いじらざるを得ない状況もあつたのだけれど。

——ケースには高校の頃の制服やら何やらが入つていて……懐かしさに負けてしまつた私は、いつのまにか中身を全て、床に広げてしまつていた。

「……」

それでも、かわいいわよね。この制服。

思わず姿見（結婚したときに、お父さんが贈つてくれた）の前に立ち、体に制服を重ねてみる。

「……」

ふふ、まさかね。

「んー」

いえいえ。

「やつぱりこの頃に比べちゃうと、腰あたりがちょっと気になるわ——」

うえつへつへつへ。とは笑わなかつたけれど、曆とは結局こうなつちゃつたわね。

別に、私の腰は安産型つてわけじやないけれど。

それにしても——

「うーん……」

「……」

……着れるかしら」

ふふ、ま、まさか、この歳で、私が、着るわけなんて、いかないわよね。ふふふ、全く、どんな、萌えシチュエーションよ。

「……」

「でも……なんとか、着れそうね」

「……」

——まわりに誰も居ないことを確認する。

今、この部屋には私ひとり。

あ、あたりまえよね。

——よしつ。

こんなとき、人って意味のない行動をしてしまうものなのね。

——えーと。

——私は、誰も来ないことを確認する。

ひとつひとつ。

確実に——

暦は……帰りは遅くなるって言つてた。

忍ちゃんは……この時間、寝てるはず。

神原は……今日は、来ない。

千石ちゃんは……暦が居ないから、来ない。寄りつかない。可愛いのにな。はあ、私、嫌われてるのかしら……

火憐さん、月火さんも、特にイベントが無いし、来ない。

羽川さんも、しばらくは海外のはずだし、

八九寺ちゃんは、ま、来ないでしょ。忍ちゃん寝てるし。

なんだかよくわからない覚悟を完了した私は、玄関の鍵が閉まっていることを確認してから、手に持つていた制服を着てみることにした。床に広げていたシャツやスカートなんかも、ちゃんと、きちんと。

「ん、さすがに、ちょっとキツいところはある……わ、ね。んー、おつと、えー……や、やっぱい？　いえ、大丈夫。ん……ん？　っしょ。やだやだ！　入るじゃない！　あ、ダメダメ……お、お——入るじゃない！

入つた！」

思わず、私は制服姿でぴょんぴょんと飛び跳ねてしまつた！

正直、おしりとか入らないと思つてたから！

ちょっと嬉しくて、はしゃいでしまつたけれど——ふと、暦に、なんか昔より若くなつたよね。とか言われたことを思い出す。

別にそんなことないのに。

よほど出会つた頃の印象が強いのね……ま、無理も

ないけれど。あれはやりすぎたと思つてゐるし、あの頃は……

「……」

「……怖いじやろ?」

「ま、まあ、いいわよね。今はそれよりも!」

「……確かに怖いですね……というか……」

「さ、さすがに、胸と腰まわりは、きついわ……ね。い、いえ、大丈夫よ。大丈夫なはず」

「なんじや?」

「お約束のように姿見の前で、くるりと一回転する私。ふわりとスカートが、ちょっと遅れてついてくる。「ふふ、まだまだいけるわね」

「いやのう。80年代じやぞ」「うーん、しかし——この制服コスプレシチュエーシヨンつて、元ネタつてあるんですね。わたしの知る限りでは、やはり、めぞん一刻が最初なんですが

「儂もじや。そもそも、そのあたりより前の漫画はわからぬがのう」「まあ漫画とは限りませんが……それにしても、わたしの実年齢でも普通、めぞん一刻なんて知らないですよね」

「じゃのう。む、めぞんといえばじや。これはこれで怖い話があるのじやが……」

「ほうほう」「といったありさまじやつた。儂は寝ようと思つていたのじやが、ちょっと奥の部屋で調べものをしていたらの……」

「——今現在の響子さんの年齢」

「ひいい！」

「なんと、五十を越えておる。かかる、儂は一桁多いがの」

「ひいい！」

「その『ひいい！』は、どちらにかかつておるのかの」

「も、もちろん前者ですよ！」

「言うておくが、うぬも生きておれば、それなりの年齢なのじやぞ」

「ふふ。永遠のロリボディと綺麗なままの心を持つわたしには、関係のない話です！」

「ま、そのあたりは儂も負けぬがの」

「ドバルーンだった頃が懐かしいです」

「宣伝するために浮くのか、うぬは。ま、それはともかく、さすがにいつまでもロリボディがアドバンテージとなつておつても、色々とまざいじやろ。こんなゞ時世じやしのう」

「ま、それもそうですね。ロリリリさんも、いつまでも

ロリコン野郎というわけにはいきませんよね。ちよつと寂しいですが——しかし、わたし達つて規制されるんですかね」

「本当に規制されるのだとすればじやが、それは恐ろしい世の中じやの。ま、なるようにならぬまい。それよりもロリリリリの件じや」

「ロリリリリさんはロリというよりも、ターゲットレンジが異常に広いだけなんですね」

「それはそれで問題じやがのう……」

「で、そのロリリリリリさんが帰つてくるんですね？ お約束としては」

「うむ。それはもう、絵に描いたような光景じやつたドバルーンだつた頃が懐かしいです」

「ふむふむ——あ、これ、美味しいですね」

「うむ。オールドファッショングルービングのおかわりはどうじや？ む、珈琲の方が良いかの？」

「あ、紅茶の方で。すみません、いただきます」

004

手にホツチキスを握^{にぎ}つてしまつていた私。

待つてくれない暦。つかつかと私の居る部屋に入つてきながら、私の足元から胸元まで暦の視線が移動する。

そして、目が合う。

そして数秒の沈黙と、間――

「セ、センジヨーガハラサマ?」

いつぞやのいただけないカタカナ読みとは違う、裏返つた声のカタカナ。滅多に聞けない暦のレアボイス!

いえ! 今はそんなことよりも……

「あ、あの……そ、掃除をしていたら、せ、制服を見つけてしまつてね……」

「よつと裏返つた声の私。たぶん、これも、レアボイス。

「す、すすす、すごいな!――よつと、おしりとか胸がえつちすぎぞ!」

「そ、そうかしら――」

思わず、さつき制服と一緒に用意した文房具を両手に持つてしまつ。氣付けば右手にカツターナイフ、左

ちよ、よつと暦の目が危ない。思わず目を少しそ

――カチヤカチヤ。
カチヤン、ガチヤリ。

「え? ちよつと! なんで玄関の鍵が開くの、え?
なんで扉が開くの!」

「ただいま、たつだいまー」

「なんで暦そんなにテンション高いのよ! ていうが、
今日は遅いって言つてたじやない!」

「こ、暦! どうしたのこんなに早く!」

「いやあ、例の用事、キヤンセルされちゃつてさあ……」

「きやー! ちよ、よつと待つて」

「えー、どうしたのー」

らしてしまった私。

なんだか、身の危険を感じる——

「動かないで」

反射的に体が動いてしまう。

今度はしつかり暦の目を見て。

「いえ、動いてもいいけれど、とても危険よ」

ホツチキスで（さすがにカッターナイフは洒落にならないし）自分の夫を牽制してしまつてはいる女がそこのには居た。

ていうか私だった。

——と、とにかく、ここは落ち着いて対処しないと

……

「ひ、ひたぎさん？　あ、危ないよ。危ない……」

「私は——ちょっと待つてと言つたはずよ」

「え、だつて……」

「はあ。あなたの頭に脳味噌が入つてることとは確認

したけれど私の言葉を理解できないだなんて、ここまでとは思わなかつたわね」

「ひいい！」

もちろん、これは威嚇のため。

——静かな部屋の中、ホツチキスの針が床に落ちる。あとで拾つておかないと危ないわね……

「え、ちょ、ちょっと僕悪いことした？　ていうか脳味噌、確認されちゃつてたの？」

「ええ、あなたが寝ているときにそ、お、つとね。目視で確認したわ」

「……それは獵奇的な」

「ちなみに、悪いところは存在自体かしら。あなたの存在自体が罪ね」

「酷い言われようだ。あ、でも、それはちょっと格好いいな」

「ええ、だから私はここに居るのよ」

——これは本当の話。

「贖罪させてください！」

じりじりと距離を詰めてくる暦。

がじやこづ。

条件反射は有効だった。今度からお仕置きはこれに
しましよう。なんて思いながら暦と対峙する私。

「わ、わかったよ。部屋から出るから。ちょっと出で
るから、とにかく着替えなよ。な？」

「そ、それでいいのよ。あまりにも聞き分けがないよ
うなら、私も嫌なことをしなければならないし」

「なんだかノリノリにしか見えないけど……」

「あら、何か言つたかしら？」

「いえいえ！ なんでもございません！」

緊張が解けた空氣——部屋から出でていこうとする暦。

ふう、とりあえずはこれでいいわ。

と、とにかく着替えなきや。

はあ——なんでこんなことになつてるのかしら。

はあ……私、何やつてるんだろ。

「うえつへつへつへ」

——油断していた。

昔の私なら絶対に「こんなことなかつたのに。ありえ

なかつたのに——というか、暦に対して油断も何もな

いわよね。

一気に距離を詰められ、なにもできないまま私は抱
き締められていた。強く。強すぎるくらいに。

はあ——いつもの暦の得意技。速攻は私の十八番
だつたのに……。

うそつき。

「もう、しようがない子ね——いえ、阿良々木くん。
私に抱き付くなんて。全く、一体全体どういうつもり
なのかしら」

「戦場ヶ原つ！」

懐かしい呼び方をして、強引に口を塞いでくる暦。

もう、そんな呼び方しないって言つたくせに。

うそつき。

——もう、仕方ないわね。

「阿良々木くん。ねえ、暦くん。私、怪異に取り憑か
れちやつているのよ。どうにかしてくれる？」

「ん？」

「あなたという怪異よ」

〇〇五

「結局、最後はこれですか」

「結局、これじやのう……じやがの」

「はい？」

「このプレイ、しばらくの間——というか、今でもハ

マつてあるようじや……」

「ひいいー」